

万年筆で書く

谷口雅宣

1. [本文1](#)

万年筆で書く

---

## 万年筆で書く

谷口雅宣

今日は朝から、生長の家本部の新館六階にある「総裁室」で執務した。

とは言っても、通常の仕事はあまりできず、部屋の`整理、を行ったのである。ちょうど日曜日で、休みをとっている職員も多かったから、私の決裁を待つ書類や案件もほとんどなかった。そこで私は「こういう時こそ！」とばかりに、旧館二階の「副総裁室」から、本や書類、文房具やプリンターに至るまでの様々な道具を、引っ越しさせることにした。

こうやって移動した道具の中に、パーカー社の万年筆があった。

私は、万年筆を原稿書きに使わなくなって久しい。新聞記者をやっていた時はボールペンが主体で、その後はパソコンとプリンターで文章を作った。近ごろはプリンターもあまり使わずに、ノートパソコンで作った文章をそのまま、自分のブログや編集部に送信することが多い。しかし今、この文章は、私の執務室の整理棚の中にしまっていた万年筆で書いているのである。

この万年筆は、昔誰かからいただいた高級品に違いないのだが、いつ、どんな機会に、誰からもらったのか全く記憶がない。「文章はパソコンで書く」ということが習慣になり、それに何の疑問も感じなかった私にとって、万年筆は永らく`不要品、と見なされてきたのである。この万年筆は、贈答用の化粧箱に入ったまま、カートリッジも付けられずに放置されていた。それを今なぜ、突然に使う気になったのか.....。

たぶん理由は二つある。

一つは、父の「道具」に対する態度に感銘かんめいを受けたこと。もう一つは、手書きで文章を書かなくなったことの弊害に、ようやく気づき出したことである。

父の葬儀そうぎを終えた後、私は父との公的な役割交替を進める中で、父の「道具」に対する誠意ある態度に心を打たれてきた。そういう父の態度は、遺品の所々に残された手書き文字や、父が仕事の道具として使っていた数々の文具や小物、さら

には父の趣味の一つだった写真の整理や管理の方法の中によく表れていた。

例えば、父は生前に数百冊も本を書いたが、父の執務室には著者献本分として出版社から贈られた本が相当数残っていた。そういう中に、父が原稿執筆用や、生長の家の講習会で使うために使った本も混じっていた。それらをパラパラとめくると、途中に付箋があったり、新聞記事のコピーがはさんであったり、父の文字で書き込みがあったりする。当たり前といえば当り前のことで、私も自分の本に同じようなことをする。が、その仕方が、いかにも遠慮がちなのである。別の言い方をすれば、「本をできるだけ傷つけず、汚さない」という配慮が歴然としているのである。

一冊の本の中で使いたい部分を指示するのに、頁の隅<sup>すみ</sup>を折ることは決してせず、文字を書き込む場合は必ず鉛筆で記入し、しかも決して強く書かない。注意を喚起するために引くサイドラインも、鉛筆で弱々しく引いてあるのだ。その様子は、消しゴムで消せば跡が残らず、新品同様にもどることを意図したかのようだ。

文房具や小物の使い方をいちいちここに書くことはしないが、一つだけ例を挙げるとすれば、メモ帳のことだろう。そのメモ帳は、私が父の執務室の新たな使用者として入り、最初に使った道具の一つだ。応接セットの脇に置かれたサイドテーブルの上であって、鉛筆スタンドも付いていた。が、よく見ると、メモ用紙を置いた台は厚紙製で永く陽<sup>ひ</sup>に当たったためか、乾いて反り返っているのである。また、鉛筆は使い込んで長さ四センチほどに短くなっており、それがヒモによってメモ用紙の台と連結してあるのはいいのだが、連結部には鉛筆に差し込む式の古い消しゴムが使われている。これも機能的には全く合理的で何の問題もないのだが、「見栄え」という点では不満が残る。確認したわけではないので断定はできないが、メモ帳を構成している五つの部品——メモ用紙の台、メモ帳、鉛筆、消しゴム、ヒモ——は、どれもが当初はメモ帳の部品としてあったのではなく、別の所にあったものが父の意図によってメモ帳として組み立てられ、利用されていた——そんな印象が強くするのだった。

父はこのように、道具を使えなくなるまで徹底的に利用する人だった。これを別の言葉でいえば、父はまだ使えるものを「古い」とか「見栄えが悪い」とか「機能が劣る」などという理由で捨てることをしなかった人である。この最後の点で私が驚いたのは、父の執務室には仮名専用のタイプライターと、パソコン以前のワープロ専用機がまだ残されていたこと。さらに言えば、カセットテープレコーダーとベータ規格のビデオレコーダーは、父が倒れる寸前まで「現役」として使われていた

らしいことだ。

文章を手書きすることに話を戻そう。

パソコンによる文章作成の弊害に気づかなかったと私は書いたが、その弊害とは漢字を忘れることと、手で書く文字がきたなくなることだ。私の場合、前者の中には漢字の書き順がいい加減になることが含まれていた。文章を手で書いていれば、漢字を思い出せない時は辞書を引くほかはないが、パソコンでは漢字変換ソフトが自動的にいくつかの変換候補を漢字で表示してくれるので、その中から「それらしい」と思う漢字を選ぶだけですむ。これに比べて辞書を引くときは、手と目と頭を動かして、正しい漢字を辞書の中から<sup>さが</sup>探し出さねばならない。そしてさらに、辞書で見つけた漢字を紙の上に間違わずに手で書き写す作業が必要になる。これは「効率」という面から見れば大変非効率で、脳に課せられる仕事量は<sup>ぼうだい</sup>膨大である。しかし、脳という器官は、使えば使うほど`性能、が向上し、使わないと劣化する性質をもっているから、脳の仕事量が多い作業の方が少ない作業よりも「向上」や「改善」の余地が大きいのである。

かくして、漢字は辞書を引けば引くほど、手で書けば書くほど憶えられ、かつきれいな文字で書けるようになる。パソコンを愛用して文章を書く人は、今や漢字文化圏の人類の相当数に及ぶだろうから、この「弊害」に気づいている人も多いと思う。しかし、漢字変換ソフトの機能向上は続いているし、パソコンによる文章作成の最大のメリットと思われる「<sup>すいこう</sup>推敲時の訂正のやり易さ」は、手書きに戻る決意を鈍らせるに充分と思われる。だから私は、今のところ、文章作成に際しては双方の方法の長所を生かして、双方を<sup>てきぎ</sup>適宜に使うのがいいと思っている。

もう一つ、パソコンに頼った文章作成には、私が気づかなかった問題があるということ、作家の渡辺淳一氏が教えてくれた。

渡辺氏のエッセーの中に「手書き作家の本音」というのがあるが、その中で氏はワープロ（たぶんパソコン上のワープロソフトの意味だろう）で書くことで、文章のスタイルが変化する可能性に言及している。

この小説は手書きかワープロか、読んでいてなんとなくわかることもある。

たとえばワープロで書いた小説の場合、いろいろ書きこみすぎて、冗長になる傾

向があるようである。とくにある事件や人物に関する情報とか資料がよくこなれず、単調に書き連ねられていることが多い。（『手書き作家の本音 風のように』、一三頁）

この箇所を読んで、私はハッと胸に感じるところがあった。パソコンで文章を書く最大の利点は「推敲時の訂正のやり易さ」だと先に書いたが、そのことを念頭に置いて書く文章と、訂正が容易でない手書きの文章とでは、書く側に言葉や表現を選ぶ際の真剣さに違いが出てくる——そういう可能性は充分にあると感じたのだ。

ところで、私の父は昔、仮名タイプライターやワープロ専用機を使っていたことを書いたが、その後、ノートパソコンで文章を書いていたことを私は知っている。が、最晩年には、原稿用紙に万年筆で文字を書く方法にもどっていた。その理由をき訊く機会はついになかったが、手元にある道具を徹底的に使うことに喜びを見出していた父のことだから、最後の道具である自分の肉体を誠意をもって使おうと、心に決めていたのかもしれない。

（二〇〇九年四月十五日）

【参考文献】

○渡辺淳一著『手書き作家の本音 風のように』（二〇〇二年、講談社刊）